

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載 ◆ 第25回 / 正面玄関ガラスレリーフ扉

Residence of Prince Asaka 1933—

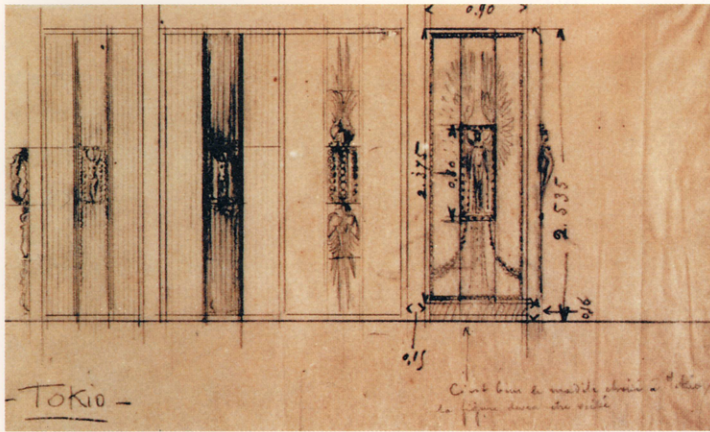


図1

庭園美術館のシンボルといえば、すぐに思い浮かぶのはルネ・ラリックのガラスレリーフ扉ではないでしょうか。夕暮れが早いこの季節、暖かいオレンジ色を背に浮かびあがる姿はなんとも幻想的です。

朝香宮邸において、ラリック作品はこの扉だけではありません。大客室と大食堂のシャンデリアもラリックの作品です。しかしこの扉で特筆すべきことは朝香宮邸のために製作されたということです。この作品のためのデザイン画がいまでも残っています。

そこには4つの案が描かれています。向かって一番右側のデザインに矢印が書かれ、「これが東京で選ばれたモデル、人物を薄布で覆うこと」とラリック自筆のメモがあります。朝香宮邸の室内装飾にはご家族で好みの壁紙を選ぶなど宮家が深く関わっていたので、おそらく扉のデザインについても両殿下のご意見が反映されたのではないのでしょうか。正面玄関に裸婦は相応しくないと考えられたのか、完成品である扉ではラリックのメモどおり、翼のある女性像はギリシア風の薄布をまとっています。

室内装飾を担当したアンリ・ラパン、そしてラリックも朝香宮邸建設にあたり一度も来日していません。僅かな手紙のやりとりでこの類稀な建築が完成したのです。設計・監理を担当した宮内省たくみりょう内匠寮の苦勞は並大抵ではありませんでした。

扉の設置にあたって大変な苦勞・工夫をしたようです。扉は中央の開閉部及び左右両脇の4枚の扉で構成されています。各扉は5つのパーツにわかれています。船で日本に到着後、ガラスレリーフ部分をpushする押縁の調整や金物のねじれ、曲がりの修正を施し、そして全体

を固定する金属製外枠と柱は日本で新規に製作されたものです。*1

宮家関係者の間でも当時からこの扉がルネ・ラリックの貴重な扉という認識がありました。美術館開館当初から、扉には宮家時代にできた亀裂が2ヶ所ありました。*2 ご家族が帰宅した折りに強く扉を閉めたことが原因とのこと。その時から宮家の方々も現在と同じように右手入り口を使用されるようになったそうです。



図2

昨年「旧朝香宮邸のアル・デコ」展開催中、このラリックの扉を1度だけ開けました。夜間開館「夜の美術館」を記念した夜の催しのためです。それは一日だけの真夏の夜の夢のようでした。扉は再び閉じられ、今日も宮家当時と変わらず優雅な4体の女性像が来館者をお迎えしています。(高波) ◆



図3

図1.ルネ・ラリック
デザイン画(朝香宮邸扉)
1931年
財団法人北澤美術館蔵

図2.3.夜間開館「夜の美術館」
平成18年8月25日

*1.「内匠寮 朝香宮邸新築工事録三」[第十七号 玄関大扉改修其他工事の件]

*2.開閉部分の左扉については平成9年に購入したスベアのレリーフと交換したため、亀裂のあるものは現在は右側の1ヶ所のみです。